

# 甲 府 城 跡

—総合事務所建設に伴う発掘調査報告書 —

2007.3

東日本旅客鉄道株式会社  
甲府市教育委員会

# 序

近年全国各地の自治体で地域の資源を積極的に活用したまちづくりが推進されています。歴史や伝統文化、自然、伝統産業などを保護しつつ、地域の活性化に活かしていくことが求められていますが、そのためにも地域の歴史を正しく掘り起こし理解していくことが不可欠です。

甲府城跡は現在、舞鶴城公園として甲府市民はもとより広く県民に親しまれている城跡公園です。江戸時代には堀と土塁に囲まれた広大な城下町を形成し、甲府町火消しの習俗や道祖神幕など、マチならではの風習が伝承されてきました。甲府市街地は、甲府空襲によりそのほとんどを焼失してしまいましたが、現在でも甲府城下を取り囲んだ堀の痕跡や、城下町へ飲料水を供給した古の水路などを随所に見出すことができます。本書が江戸時代における甲府城下の歴史・文化への理解を深めるために、多くの方々に活用されますことを願ってやみません。

最後になりますが、このたびの記録保存に際し、貴重な文化遺産に対する深いご理解とご協力をいただいた東日本旅客鉄道株式会社を始めとする関係各位に感謝申し上げるとともに衷心より深くお礼申し上げます。

平成19年3月

甲府市教育委員会

教育長 角田智重

## 例　　言

1. 本書は山梨県甲府市丸の内1丁目560番における甲府城跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、東日本旅客鉄道株式会社八王子支社の総合事務所建設工事に伴うものであり、事業主体者である東日本旅客鉄道株式会社八王子支社との協議を経て発掘調査に係る業務委託契約を締結し、甲府市教育委員会が調査主体となって実施した。
3. 本調査から報告書作成にいたる経費は事業主体者が負担した。
4. 本遺跡に係る発掘調査は伊藤正幸（甲府市教育委員会文化財主事）が担当した。
5. 調査の期間は次のとおりであり、本調査終了後に新たに業務委託契約を締結して整理作業を行った。

本　調　　査 平成18年1月25日から平成18年3月20日

整理作業期間 平成18年9月1日から平成19年3月31日

6. 本書の執筆・編集は末木端夫（生涯教育振興室文化振興課長）を責任者として伊藤が行った。整理作業に係る遺物洗浄・注記・接合作業、遺物実測・図面作成書作業及び挿図・写真図版の作成は栗田かず子・鈴木由香・内藤真千子・中村里恵が行った。
7. 本書に係わる出土遺物及び記録図面・写真等は、甲府市教育委員会で保管している。
8. 発掘調査参加者（50音順）

金井いく代　　金丸恵美　　岸本美苗　　北野礼子　　倉田勝子　　小宮通子  
齊藤里美　　武井美知子　　深沢和樹　　古屋袈裟男　　保坂裕貴　　矢崎孔明  
渡辺　茂　　渡辺百合子

## 凡　　例

1. 本書に掲載した甲府城周辺の地形には、国土地理院の地図閲覧サービス（試験公開）2万5千分の1地形図甲府及び甲府北部を用いた。
2. 遺構・遺物実測図の縮尺は、図面上に表示したスケールのとおりである。
3. 遺物観察表の色調は、「標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1997後期）に基づいて記載した。
4. 図面のスクリーントーン表示は、以下のとおりである。



搅乱



石

# 目 次

序

例言・凡例

目次

挿図・挿表目次

## 第1章 甲府城の概要

第1節 地理歴史的環境 .....	1
第2節 甲府城の変遷.....	1

## 第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯 .....	3
第2節 試掘調査結果 .....	4
第3節 発掘調査位置.....	4
第4節 調査経過 .....	5
第5節 基本層序.....	5

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 第1区の遺構と遺物

溝跡 .....	8
小竪穴 .....	9
遺構外出土遺物 .....	11

### 第2節 第2区の遺構と遺物 .....

12

## 挿図・挿表目次

図 1	甲府城周辺の地形	2
図 2	調査地全体図	3
図 3	試掘調査平面図	4
図 4	試掘調査土層図	4
図 5	甲府城復元想定図	5
図 6	基本土層図	6
図 7	第1区全体図	6
図 8	溝跡平面図(1)	7
図 9	溝跡平面図(2)	8
図10	小豎穴平面図	9
図11	出土遺物	10
図12	第2区全体図	12
図13	第2区堀跡	13
表 1	出土遺物一覧表	11

### 写真図 版

図版 1	土層状況、試掘溝内状況①、試掘溝内状況②
図版 2	南部調査地の状況①、南部調査地の状況②、南部調査地の状況③
図版 3	南部調査地の状況④、南部調査地の状況⑤、南部調査地の状況⑥
図版 4	基本層序、1号溝跡（西側より）、5号溝跡（北側より）
図版 5	1～3号溝跡、2・3号溝跡西端部、1号溝跡西端部
図版 6	3号溝跡（東端部）、3号溝跡（土層状況）、1区東部の状況
図版 7	石幢基部検出状況①、石幢基部検出状況②、石幢基部検出状況③
図版 8	2区堀跡検出状況、堀跡土層状況、石積状況
図版 9	古墳時代の遺物①、古墳時代の遺物②、古墳時代の遺物③
図版10	近世の遺物、近代の遺物①、近代の遺物②
図版11	近代の遺物③、近代の遺物④、近代の遺物⑤

# 第1章 甲府城の概要

## 第1節 地理歴史的環境

甲府盆地は東の笛吹川と中央部の荒川、そして西の釜無川により形成されているが、それらの河川に流れ込む中小河川により、山地部分は複雑に開析された地形を形成していることが読みとれる。一方甲府盆地の北部に連なる山並みは、400mから700mほどの標高を有するが、いずれも火山性の山々で、良質な安山岩を産出する。市内東部、甲運地域は古墳時代後期の積石塚古墳群の分布が顕著で、200基余りの積石塚古墳が知られている。

太良峠に端を発する相川は、愛宕山と湯村山に挟まれた地域に小規模な扇状地を展開する。いわゆる相川扇状地で、先端部は概ね愛宕山トンネルから塩部に至る、通称『山の手通』に一致する。扇央部から扇端部まで、250mほどの標高差を有する扇状地である。

この扇状地上には1519年に武田信虎により館が造営され、さらに館を中心とした城下町が整備された。以降1581年に新府城へ移るまで、武田氏による領国経営の中心地として発展するとともに、軍事的諸施設を整備した。武田氏滅亡後の甲斐国は、一時的に織田信長の所領となるが、本能寺の変により信長が失脚すると北条・徳川両氏の係争の地となり、最終的に徳川がおさめることとなるのである。

## 第2節 甲府城の変遷

戦国時代から近世に時代が変わり、武田三代の居館であった櫛淵ヶ崎の館は要衝の地ではあったものの、兵農分離による武士の城下町集住と都市生活の発展、交通及び政治・経済上の便宜性と日常の居住性等が求められる近世の城下町として発展するためには地形的な制約が大きく、そのために新たな地を求める必要性が生じた。一条小山が適地として選定されたのは、周囲が広く開けた平地の中の小丘陵であったためと言われる。

当地は古代、一条忠頼の居館が構えられた地で、甲府城築城当時は名利一蓮寺の寺域であった。寺域は広大で、門前町も既に発達していたという。築城の縄張りに際して、一蓮寺は現在の太田町に移転された。

甲府城の築城は、徳川家康の命により平岩親吉を城代として甲斐国内の統治にあたらせた(1582)ことから始まる。1590年に徳川家康が関東へ移封となり甲斐国が豊臣秀吉の勢力下に入ると、秀吉に近い人物を城主として迎え入れることになる。1600年までに羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政・幸長父子らが甲斐へ入国してくるのだが、甲府城の築城は城下町の整備を含めて浅野氏の代までにはほぼ完成したといわれる。

関ヶ原の合戦に勝利した徳川方に味方した浅野長政・幸長父子は21万石余りを加増され和歌山へ転封、甲斐は再び徳川領になり、平岩親吉が城代として再度入甲することになるのである。親吉は浅野父子がほぼ完成させた甲府城に若干手を加える程度で入城したと思われるが、家康の九男義直の城代として、1607年までに実務を執り行ったとされ、同年義直は清洲城主に、親吉は犬山城主となりそれぞれ転封される。これより後、柳沢吉保が城主として入城する(1705)まで城主・城代とも不在で、甲府城には家老職の城番を置き、実務を執ったとされる。

柳沢吉保の入城により甲府城は大々的に修補増築及び城下町の整備が行われた。吉保の民生は嫡子吉里に受け継がれ、灌漑用水路として保坂堰を完成させたほか、葡萄をはじめ



図1 甲府城周辺の地形

とする農産物の生産も奨励したとされる。吉里は1724年に大和郡山へ転封となり、以降幕末まで甲府勤番制度により、大手並びに山手の勤番士による支配が続くことになるが、城主不在の甲府城にあって2度の大火及び御金蔵破り事件などにより徐々に荒廃し、幕府財政もままならない中で城の修復は進まなかった。1866年に甲府城代が置かれるが、2年にも満たない期間で4名が任命されるという状態で、明治新政府による無血入城をいたしました。

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

甲府駅周辺整備事業計画の中で、現在駅北口にあるJR東日本総合事務所を駅南のJR敷地内に移転することになった。

今回の計画に先立ち、甲府市教育委員会では平成15年12月12・13の両日に西側隣接地で試掘確認調査を実施したが、その段階では旧国鉄時代の建物の基礎で試掘溝全体が搅乱されていることを確認した。しかし、平成9年10月に市営駐輪場建設工事に先立ち東側隣接地で実施した試掘確認調査では、甲府城内の屋形曲輪の堀跡が確認されていることを考慮しながら、旧構内の図面等を検討し、調査範囲を定めたうえで、教育委員会は事業者に対して埋蔵文化財の保存措置の必要性を説明した。

その後数回の協議を行い工期との調整を図る中で、平成17年12月20日に発掘調査にかかる業務委託契約また平成18年8月22日には報告書作成業務に係る業務委託契約を締結し、総合事務所建設工事に係る300m<sup>2</sup>を対象に埋蔵文化財の記録保存を行い、地域の歴史を伝える資料として保存活用することとした。

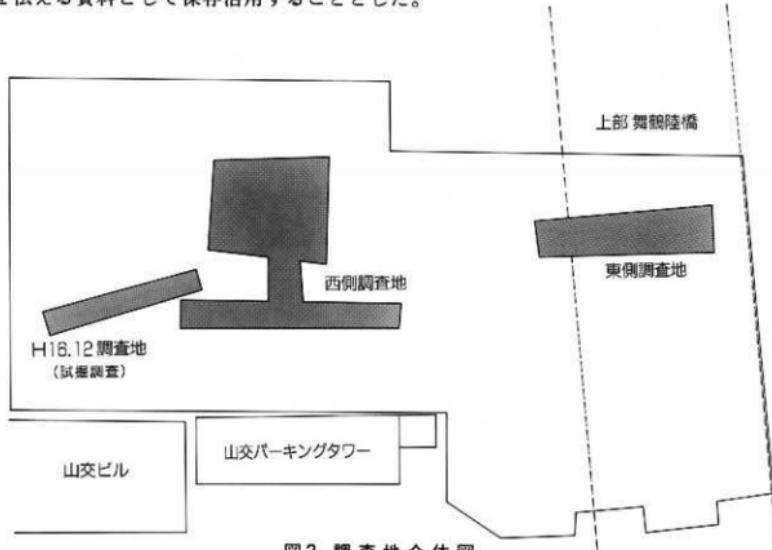


図2 調査地全体図

## 第2節 試掘調査結果

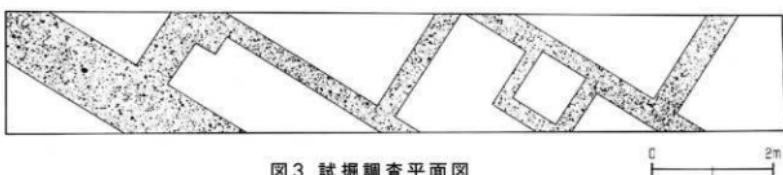


図3 試掘調査平面図

平成15年12月12日～13日に行った試掘調査は、幅2m長さ11mの試掘溝を設定し、重機で-120m（一部-200m）まで掘り下げ遺構・遺物の存在を確認したが、国鉄時代の建物の基礎が-10cm～-110cmの深さまで達していた。また-90cm前後の位置からは建物に伴う鉄物管が3本確認されたり、中央や東寄りでは柱状に設置されている基礎コンクリートが確認された。

試掘溝東側の基礎コンクリート下部からは、粘性の強い暗茶褐色土が確認されたが、幅や長さ・深さを伴うものではなく、遺物も何ら検出を見なかった。最下層は粘性の乏しい黄褐色土で、ここが地山である。

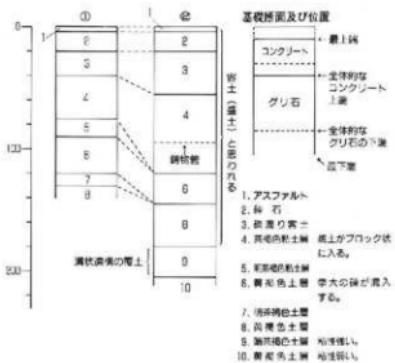


図4 試掘調査土層図

## 第3節 発掘調査位置

今回の発掘調査を行った場所は、屋形曲輪と呼ばれる、本丸の北西に位置する清水曲輪の南東部にあり、宝永3（1706）年の柳沢吉保の代に新築された曲輪で、吉保・吉里の書院として利用されていたとされる。書院造りの建物を2棟並列させ、大規模で格式をみせる代表的な殿館だったとされる。他の諸曲輪が政務の執行に当たったとされる中で、この屋形曲輪だけは建物内部に台所・物置・土間等を配置し、城主の居住地としての機能を持っている。南に屋形門、西に屋形裏門という2つの門を持つとともに、本丸への出入りには2つの松陰門（外松陰門・内松陰門）、清水曲輪には梅松門及び竹林門により通じている。享保12（1727）年に建物が焼失以降は再建されることはない。

調査地はこの曲輪の北を仕切る堀の内側に位置し、甲府駅の改修により身延線が移動するまでホーム及び線路敷きとして使用されていた場所にあたる。

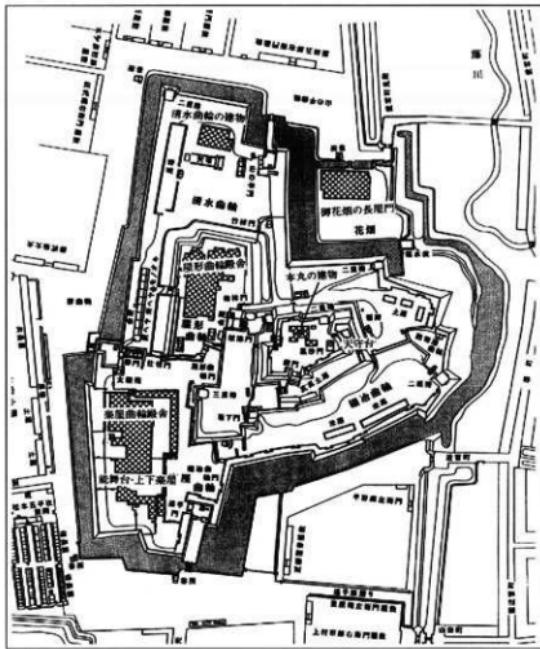


図5 甲府城復元想定図(郷土出版社「定本山梨の城」より)

#### 第4節 調査経過

- |           |   |
|-----------|---|
| 2月2日・3日   | 事務所建設予定地内に「T字」状の調査地を、幅3メートル、長さ延40メートルで設定する。                                   |
| 2月6日～20日  | トレーニング内の遺構及び遺物の検出。南北の試掘溝からは、江戸時代の溝跡が2ないし3本確認できたが、東西部分は搅乱が激しく、遺構・遺物等は検出できなかった。 |
| 2月21日～8日  | 南北の調査地を東西に拡幅。調査地を東西に横切るように3本の溝跡及び北西隅から古墳時代の土器を伴う遺構を確認する。                      |
| 3月14日～27日 | 立体駐車場部分の掘り下げ(幅4m、長さ13メートル)を開始。同時に事務所部分の埋め戻しを行う。東端部分から遺構・遺物の検出を行う。             |
| 3月28日     | 重機により調査地の埋め戻しを行う。   |

## 第5節 基本層序

1区北端部分を150cmまで深掘をし、土層を模式的に図化し、擾乱の程度を堆積状態

から、この層序を基本土層とみなした。

この位置は旧来身延線甲府駅ホームとして利用されており、地表下70cmほどまでが砂利及びコンクリート片を多量に含む搅乱層である。第4層以下が安定した旧来の土層で、第4層には近世の遺物が含まれている。近世の遺構確認面は第5層で、数本の溝跡及びピットが構築されているが、同じ面から古墳時代の溝跡が確認されたことから、近世の生活面は搅乱によりその大半が除去されたものと推測してよからう。

第6層は粘性の強い黒色ブロックが混入する黄褐色細粒砂層、さらに第7層暗赤褐色粗粒砂層、第8層暗黄褐色粗粒砂層と粗粒砂層が続くが、第8層には親指大の礫が混入する。これらのことから、第6層以下は河川の氾濫等、水の營力による堆積の可能性が強い。

## 第3章 遺構と遺物

本調査で確認された遺構は、溝跡4本、小豎穴（ピット）5基である。時代別では古墳時代の溝跡1本（SD9）以外はすべて近世の遺構である。発掘調査時に付した遺構番号は、調査の進行及び整理時点で欠番が生じたため、本報告の遺構番号が最終的な番号である。

### 第1節 第1区の遺構と遺物

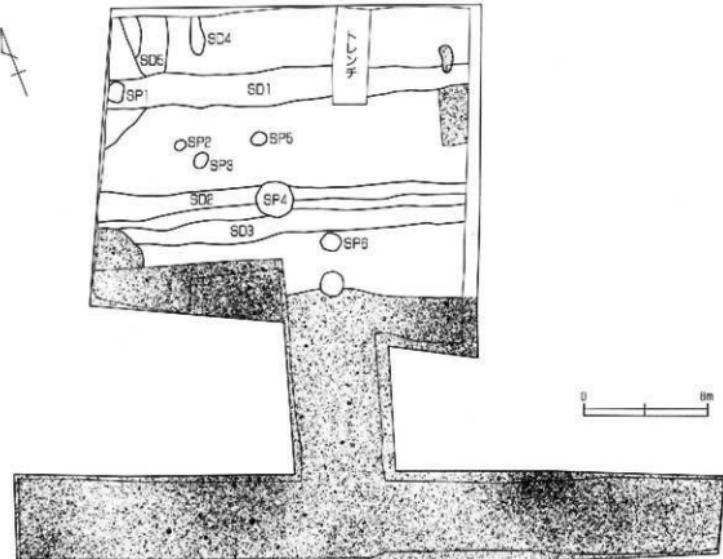


図7 第1区全体図

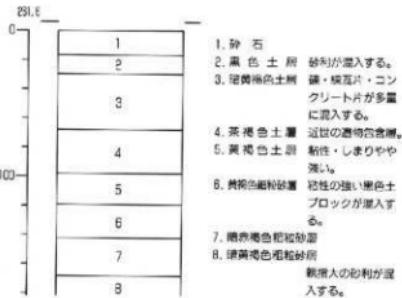


図6 基本土層図

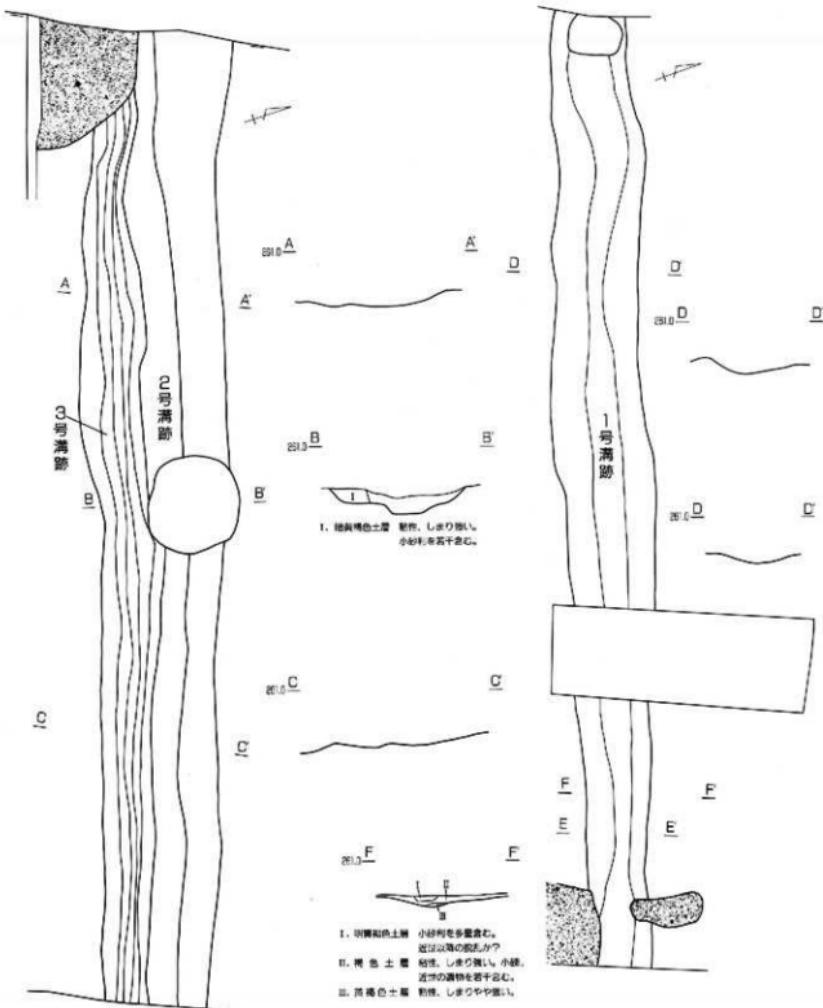


図8 溝跡平面図 (1)

## 溝跡

1号溝跡 N-108°-Eに主軸を持つ。幅1mほどで深さは深いところでも20cm程度である。西端部分でSD 5を切り、また4号ピットにより切られている。東端部分は搅乱を受けている。

覆土は粘性・しまり共に強い褐色土層で、小礫を若干含む。部分的に小砂利を多量に含む明黄褐色土の混入が認められるが、これは後世の搅乱であろう。全体的に掘り込みは浅く、遺物は伴出していない。

2号溝跡 N-107°-Eに主軸を持つ。規模としてはSD 1よりもやや大きく、南側に接するSD 3とほぼ平行し、重複部分の土層観察によれば、SD 3を切っている状況が確認された。中央部分に4号小竪穴が掘り込まれている。掘り込みは浅く不明確で、遺物は伴出しなかった。

3号溝跡 N-105°-Eに主軸を持つ。SD 2の南側に平行するように掘り込まれた溝跡で、部分的にSD 2に切られており、西端部分は搅乱を受けている。幅50cm前後、全体的に掘り込みは浅く不明瞭であるが、覆土中から近世の遺物が3点出土している。

出土した遺物はいずれも近世の施釉陶器で、破片であるため復元実測により図化した。No16は皿の口縁部～底部に至る破片である。推定口径12.4cm、器高2.9cm、底径7.6cm。No19は碗で鉄軸が施されている。推定口径14.9cm、器高5.3cm、底径10.0cm。No20は口縁部～胴部上半のみが残る施釉陶器で、器形は鉢である。

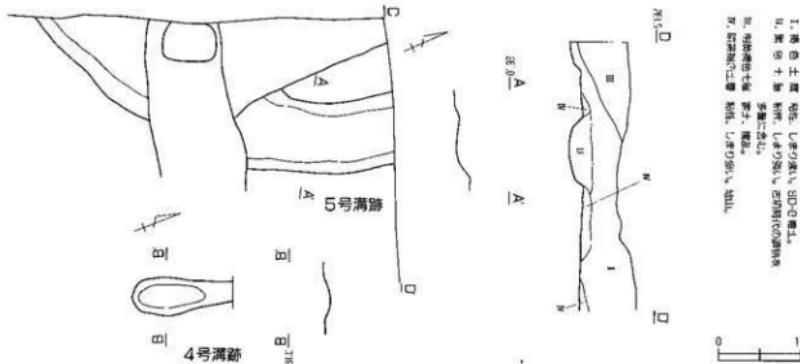


図9 溝跡平面図(2)

4号溝跡 N-14°-Eに主軸を持つ。極めて小規模であるが、北壁中に掘り込みが確認でき、平面的にも続いていることから4号溝跡とした。検出部分で長さが1.2m幅30cmほどで、掘り込みはごく浅く、遺物は伴出しなかった。

5号溝跡（古墳時代） 黒色土を覆土とする古墳時代の溝跡である。西から北へ、円弧状に湾曲しており、検出面での幅は80cm、深さは35cmを測る。覆土中から古墳時代の高坏3点と台付き壺の脚部5点が出土した。

No 1 坏部分のみが残存し、頸部以下は欠損している。胎土は比較的緻密で、焼成も良好

である。No 6 は坏部下半から頸部にかけての部位であるが、長石の混入が多く、胎土は粗い。No 7 は頸部～脚部にかけてあるが、三角形の透かし彫りが 4ヶ所認められる。長石を多く含む胎土は粗く、焼成も良くない。時期的には、No 1 が古墳時代後期、No 6 及び 7 は同前期と思われる。

#### 小堅穴（ピット）

1号小堅穴 5号溝跡西端部分から検出された。長径 66cm、短径 45cm を測る。掘り込みは 10cm と浅く、不鮮明である。西端を一部欠く。遺物は伴出しなかった。

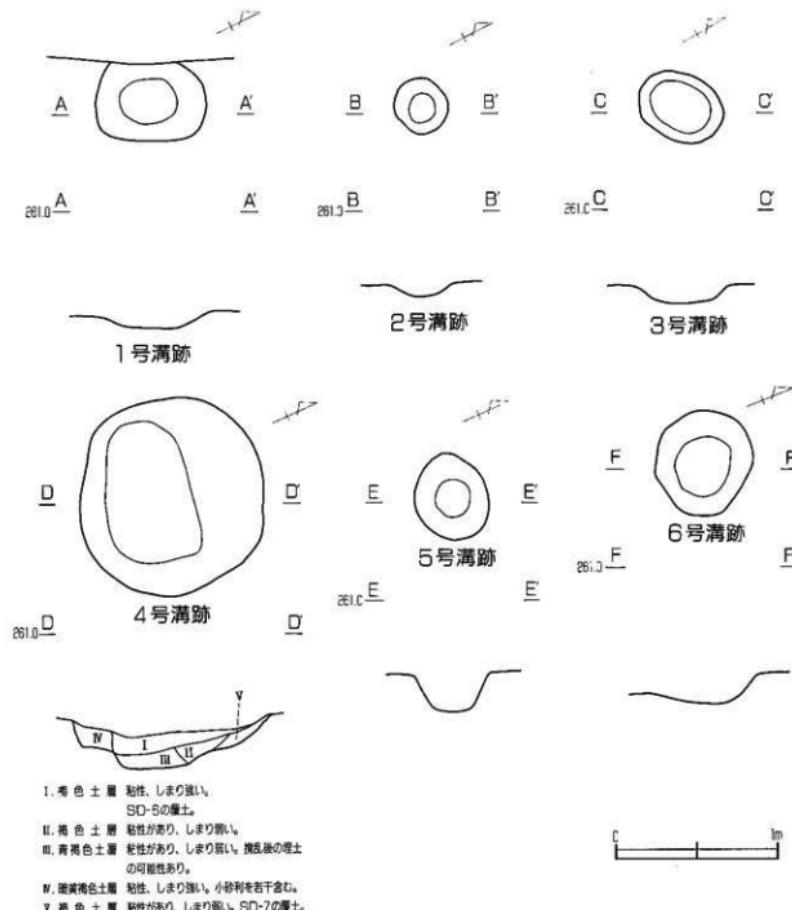


図 10 小堅穴平面図

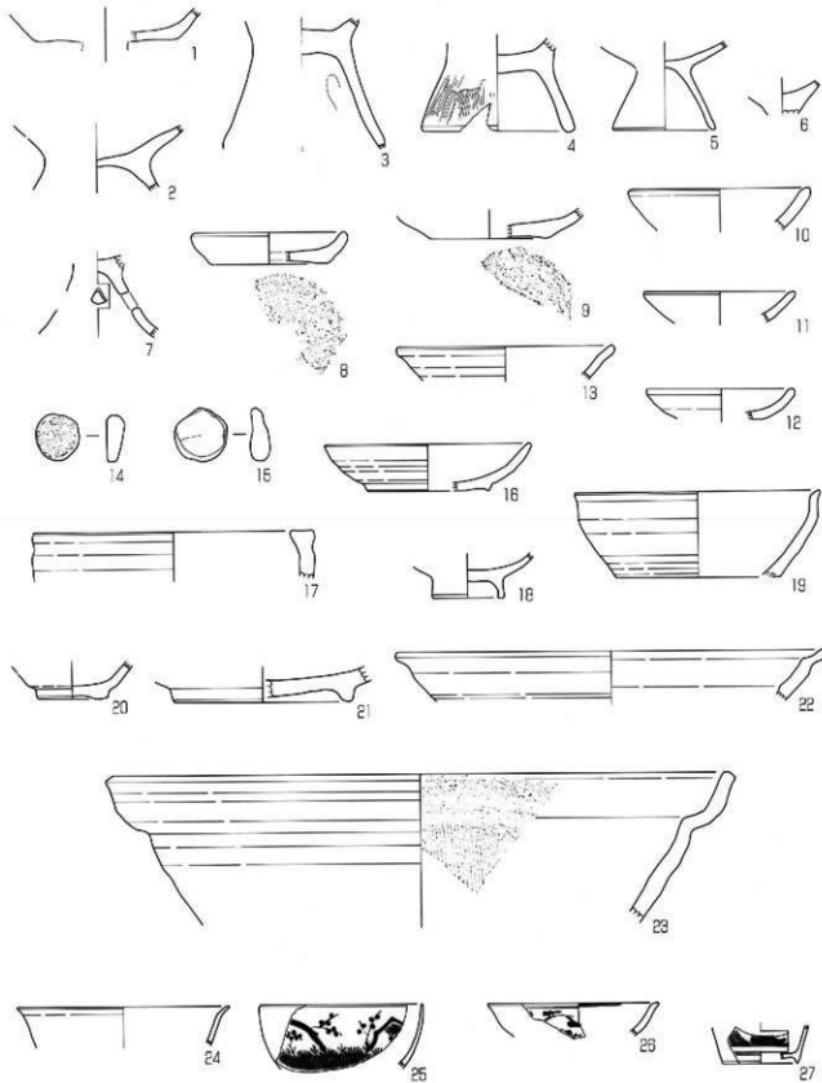


図11 出土遺物

2号小堅穴 長径33cm、短径29cmを測る。掘り込みは8cmと浅い。遺物は伴出しなかった。

3号小堅穴 長径54cm、短径39cmを測る。掘り込みは12cmと浅い。遺物は伴出しなかった。

4号小堅穴 6号溝中央部分から検出された土坑で、長径120cm、短径112cmを測る。掘り込みは54cmで、2号溝跡及び3号溝跡を壊している。西端を一部欠く。遺物は伴出しなかった。

5号小堅穴 長径56cm、短径45cm、掘り込みは41cmで、小規模ではあるがしっかりした掘り込みを持つ。遺物は伴出しなかった。

6号小堅穴 長径66cm、短径58cm、深さは16cmを測る。南壁面は搅乱されていると思われ、不鮮明である。遺物は伴出しなかった。

#### 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物が若干検出しており、復元実測が可能なものについては図示した。8~12のかわらけは近世の所産であろうが、その他の陶磁器は近世末から近代のものと思われる。2個の土製円盤については、周囲が若干研磨されているものの、文様や使用痕は認められず用途は不明であるが、かわらけの転用かと思われる。

番号	種別	器種	法量(m)			部位	調整等	胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高	底径						
1	土器	高 壊			(9.0)	壊部	ナ	赤色 粒子	良	5YR6/6橙	S D - 8
2	土器	台付壺				脚部	ナ	長石・石英・金雲母	良	5YR5/6明赤褐	S D - 8
3	土器	台付壺				脚部	ナ	長石・石英・雲母	良	5YR6/6橙	S D - 8
4	土器	台付壺		9.2		脚部	ナデ、ハケ	長石・石英	良	5YR6/6橙	S D - 8
5	土器	台付壺		6.2		脚部	ナ	長石・石英・金雲母	良	5YR7/4に赤	S D - 8
6	土器	高 壊				壊部	ナ	長石・石英・赤色粒子	良	5YR6/6橙	S D - 8
7	土器	高 壊				脚部	ナ	長石・石英・赤色粒子	良	5YR6/6橙	S D - 8
8	土器	かわらけ	(9.1)	(1.95)	(7.0)	口縁~底部	ロクロ、ナデ	長石・石英・雲母	良	5YR6/6橙	搅乱内
9	土器	かわらけ			(7.4)	底部	ロクロ、ナデ	長石・石英・赤色粒子・雲母	良	5YR6/6橙	
10	土器	かわらけ	(10.85)			口縁部	ロクロ、ナデ	長石・石英・赤色粒子・雲母	良	5YR6/6橙	9±同一個体少
11	土器	かわらけ	(9.2)			口縁部	ロクロ、ナデ	長石・赤色粒子・雲母	良	7.5YR6/6橙	
12	土器	かわらけ	(9.0)			口縁~底部	ロクロ、ナデ	長石・石英・金雲母	良	10YR8/2灰褐色	
13	陶器	皿	(13.0)			口縁部	施釉	釉	密	良	
14	土製品	円 盤	直径2.85	厚さ1.1	重量7.5g	完形	周縁研磨	長石・石英・金雲母	良	7.5YR7/4に赤	
15	土製品	円 盤	直径3.03	厚さ1.25	重量10.7g	完形	周縁研磨	長石・石英・赤色粒子	良	5YR6/6橙	
16	陶器	皿	(12.4)	(2.9)	(7.4)	口縁~底部	施釉	釉	密	良	S D - 3
17	陶器	鉢	(17.0)			口縁部	施釉	釉	密	良	
18	陶器	碗			4.35	底部	施釉、貫入割れ	釉	密	良	
19	陶器	碗	(14.95)	(5.3)	(10.0)	口縁~底部	鉄	釉	密	良	S D - 3
20	陶器	鉢			4.45	底部	鉄	釉	密	良	S D - 3
21	陶器	皿			(10.8)	口縁~底部	施釉	釉	密	良	
22	陶器	鉢	(26.0)			口縁部	施釉	釉	密	良	
23	陶器	擂 鉢	(37.6)			口縁~底部	施釉	釉	密	良	
24	白 磁	皿	(13.0)			口縁~底部		織	密	良	
25	磁 器	碗	(10.0)			口縁~底部	染付	織	密	良	
26	磁 器	皿	(10.4)			口縁部	染付	織	密	良	
27	磁 器	猪 口			(4.4)	底部	朱付、疊付無地	織	密	良	

出土遺物一覧表

単位: cm ( )復元値

## 第2節 第2区の遺構と遺物

第2区は対象地の中では南及び1区側（西側）に比べ、表面上で50cmほど低い。しかし遺構確認面は第1区と同じレベルのため、造成による土地利用の違いと思われる。

第2区からは石積みを伴った堀跡が検出された。屋形曲輪を構成する堀の北辺に当たるものである。

堀跡は調査区北側に長さ16.6mで検出されたが、北側の掘り込みは調査地外に位置していたため、南側3分の1程度の検出になった。主軸の方向はN-100°-Eにあり、全体に1列3段の石積みが伴う。検出部分での最深部分は1.8mを測る。石積みは30cm前後の自然石及び角礫（割り石）を用いて築かれているが、東端部に一箇所、宝鏡印当の基部を転用しているものが確認された。

内部は全体的に、粘性・しまり共に強い褐色土が堆積していて、拳大から人頭大の礫が混入する。また中層部分には植物遺体も混入していた。堀跡の掘り込みは、石積みより35cmほど外側から確認され、壁面は石積みの基部より下方に位置していること及び平成9年の試掘確認調査により検出された東側隣接地の堀跡から判断すると、堀が廃棄された後に石積みが構築された可能性が極めて高い。堀跡外部（南部）には、粘性の乏しい明黄褐色土（いわゆる山砂）が客土として確認できた。

遺物は散漫で、近代の瓦及び陶磁器の小破片が若干検出したが図示するまでには及ばなかった。

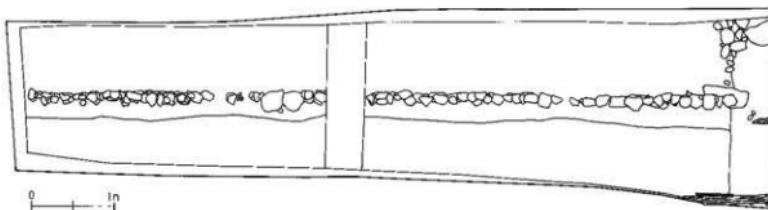


図12 第2区全体図

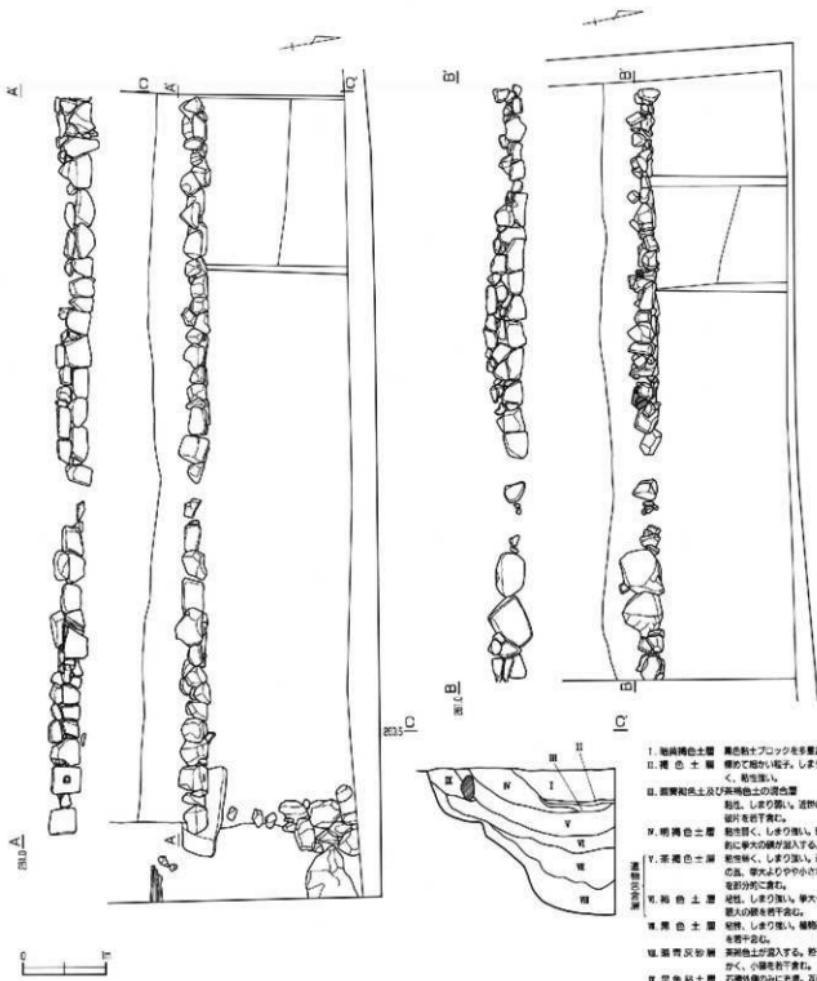
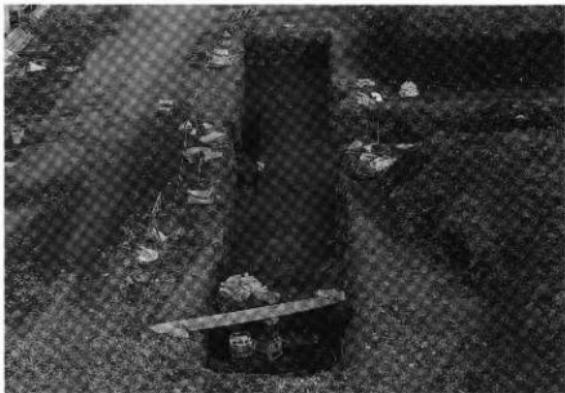


図13 第2区堀跡





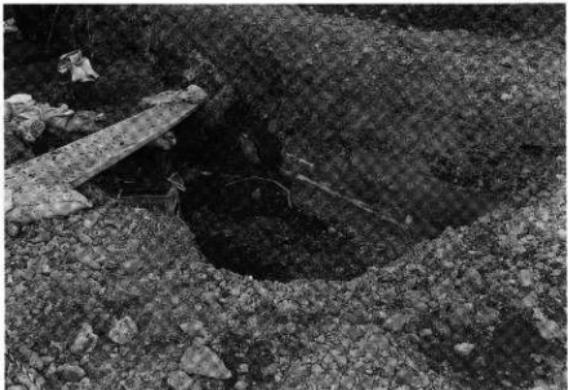
4. 南部調査地の状況 ①



5. 南部調査地の状況 ②



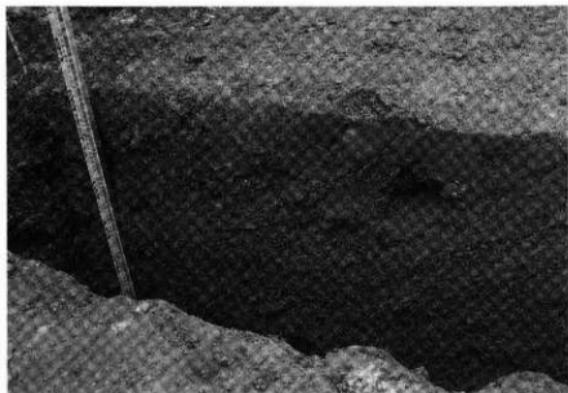
6. 南部調査地の状況 ③



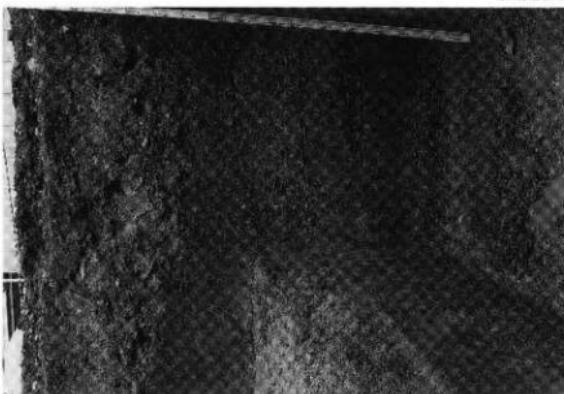
7. 南部調査地の状況 ④



8. 南部調査地の状況 ⑤



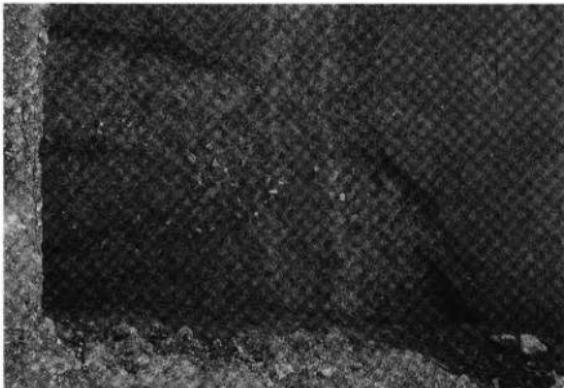
9. 南部調査地の状況 ⑥



10. 基本層序



11. 1号溝跡 (西側より)



12. 5号溝跡 (北側より)



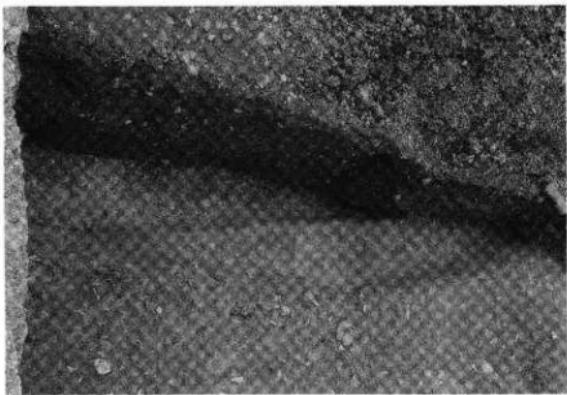
13. 1~3号溝跡



14. 2・3号溝跡西端部



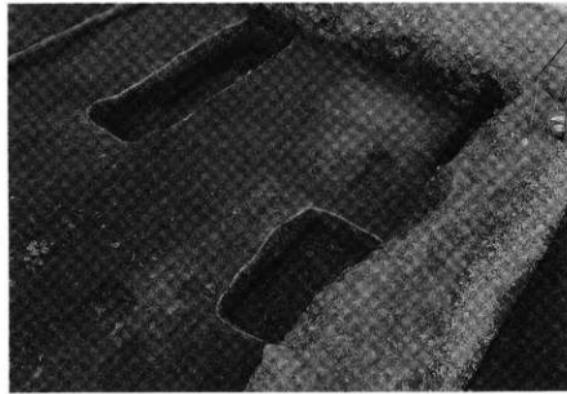
15. 1号溝跡西端部



16. 3号溝跡（東端部）



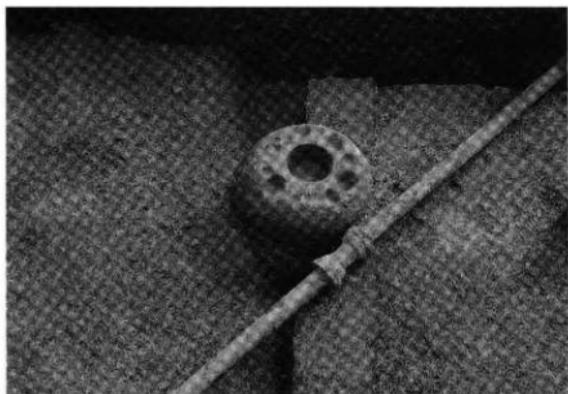
17. 3号溝跡（土層状況）



18. 1区東部の状況



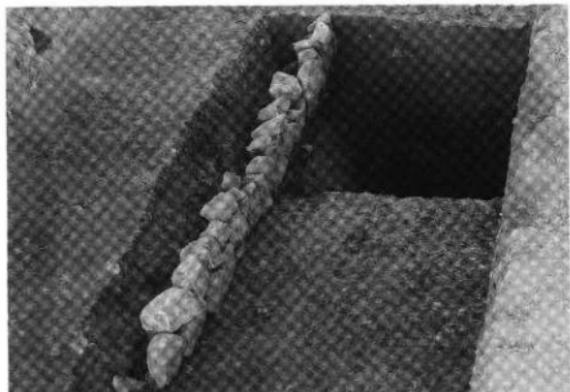
19. 石幢基部検出状況 ①



20. 石幢基部検出状況 ②



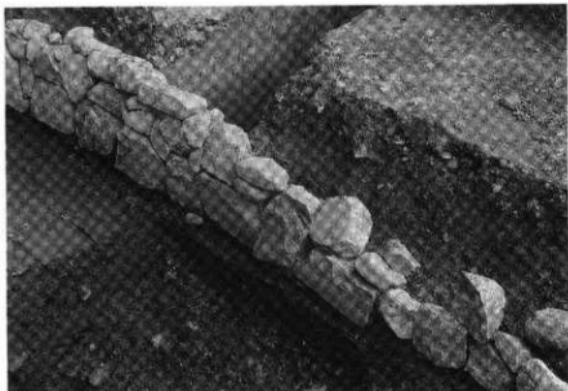
21. 石幢基部検出状況 ③



22. 2区堀跡検出状況



23. 堀跡土層状況



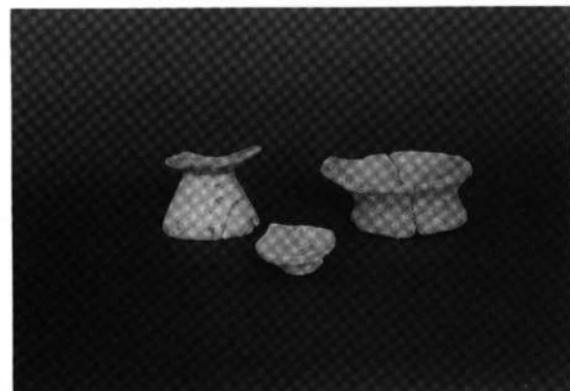
24. 石積状況



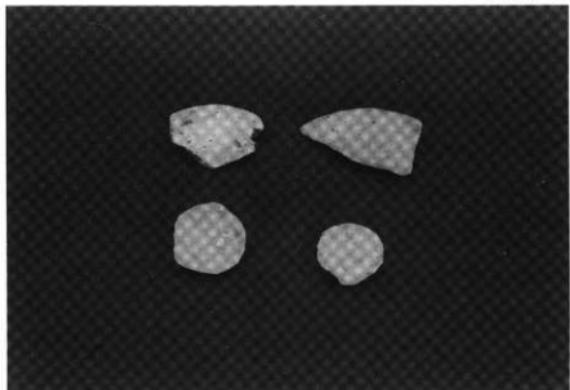
25. 古墳時代の遺物 ①



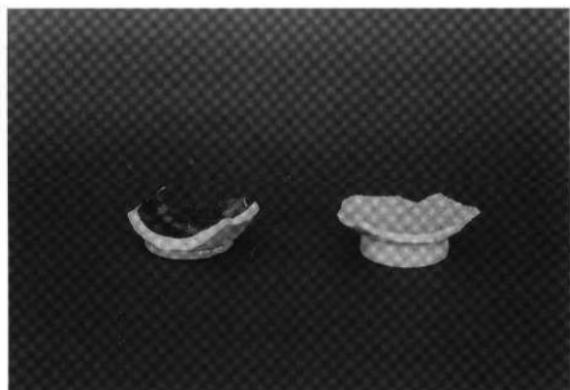
26. 古墳時代の遺物 ②



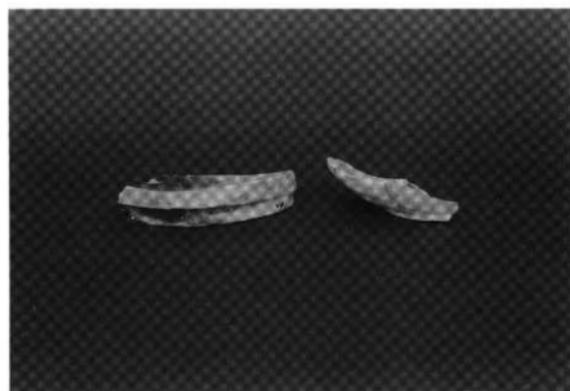
27. 古墳時代の遺物 ③



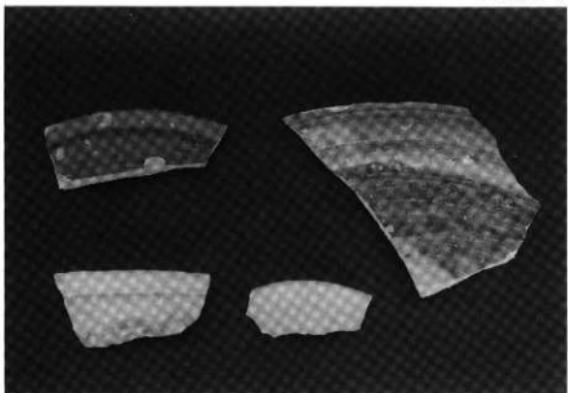
28. 近世の遺物



29. 近代の遺物 ①



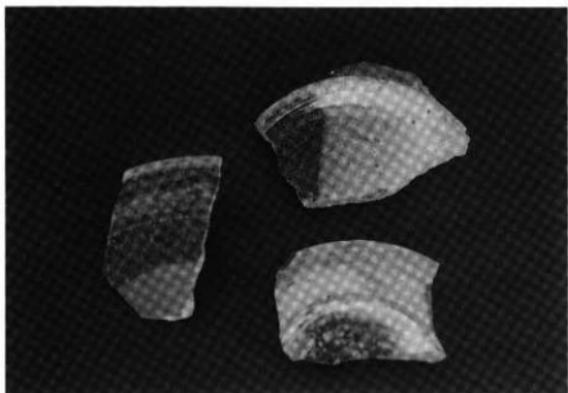
30. 近代の遺物 ②



31. 近代の遺物 ③



32. 近代の遺物 ④



33. 近代の遺物 ⑤

## 報告書抄録

ふりがな	こうふじょうあと					
書名	甲府城跡					
副書名	総合事務所建設に伴う発掘調査報告書					
卷次	一					
シリーズ名	甲府市文化財調査報告書					
シリーズ番号	34					
編集機関	甲府市教育委員会					
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号 電話055(223)7324					
発行年月日	平成19年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
甲府城跡	やまなしけんこうふし 山梨県甲府市 まるのうち 丸の内一丁目 560番	19201	35° 39' 59"	138° 34' 10"	H18.01.25 ～ H18.03.20	総合事務所建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
甲府城跡	城館跡	近世	縄跡・溝跡・小豈穴	土器・陶器・磁器・瓦		

甲府市文化財調査報告 34

## 甲府城跡

—総合事務所建設に伴う発掘調査報告書—

平成19年3月31日

発行 甲府市教育委員会

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号

TEL 055 (223) 7324

FAX 055 (226) 4889

印刷 犀内田印刷

〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10番18号

